

## 内村鑑三が見た日本の教育と教師（著書「代表的日本人」より）

2019.01 後藤 忠

元々、この「代表的日本人」は内村鑑三が明治後期に、Representative Men of Japanのタイトルで、日本人の善き諸性質を世界の人々に紹介するために英文で書いたものである。それを鈴木範久が日本語に訳して岩波書店から出版した。

そこには、政治家としての西郷隆盛、領主としての上杉鷹山、農業指導者としての二宮尊徳、教師としての中江藤樹、宗教家としての日蓮上人の5人が取り上げられており、日本人は欧米人に比してけっして遜色のないことを世界に知らしめるものとなった。（後のアメリカ合衆国大統領J.F.ケネディーがこの書の上杉鷹山に感銘を受けた話は有名である。）

その中の「教師としての中江藤樹」の序章で、内村は日本の学校（それは江戸時代の私塾のことだが）の特徴について欧米諸国の学校と比較して次のように述べている。（この書が出版された頃の日本の学校は既に欧米型の学校制度を導入してから40年近くが経っている）

鈴木範久の日本語訳は文語調で実に難解なため、僭越ながら若干の意識も含めて説明することをお許し願いたい。

- \* 我々が学校に行くのは卒業して後の生計の資を得るためではなかった。真の人、君子になるためであった。
- \* 我が国の教師たちは、わずかな歳月の間にあらゆる種類の知識を我々に詰め込むべきではな

いと考えていた。

- \* 学校で主として教えられたのは道徳であった。しかも実践的な道徳であった。しかし、特定の宗教宗派は強いられなかった。
- \* 我が国の教師たちは「人を等級に分けてはならない、一個の人間として面と面、靈魂と靈魂とを相対して指導せねばならない」と考えていた。それゆえに教師たちは、我々一人ずつを各自の特質に応じて薫陶した。
- \* 教師たちは我々一人一人のことを個人の性質や特質で知っていた。したがって、ロバは馬とともに馬具を着けられることはなかった。ゆえにロバは、打ちのめされて愚鈍となることはなかったし、馬は駆り立てられて秀才身を亡ぼすの危険を犯すこともほとんどなかった。
- \* それゆえに教師と生徒との関係は最も親密であった。我々は教師を「先生」と呼んだ。

改めて、教育基本法 第一章 第一条の教育の目的を確かめてみたいと思った。

**第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。**